

銀行はあくまで面倒をみてくれるのか？

東京福祉大学

保原伸弘

投資の効果は、しばしば投資の対象となる産業間の潜在的な補完性に依存する場合がある。

しかし、多くの場合、投資に関わる企業家本人がその状況に気が付かず。そのような補完性が発揮できずに終わる場合ある。そのとき産業や企業間をうまくコーディネーターとして銀行等が振る舞う場合にはそのような補完性が顕在化し、銀行のレント獲得とともに社会厚みが改善できる場合もあるであろう。

本稿はまず 2 期間モデルをつかって、銀行等コーディネーターの働きによって企業家本人が気づかない潜在的な生産性の発揮そして上昇が起こることを確認する。

しかし、投資企業の方も自らの資産が蓄積するにつれて、銀行に頼らず自力で市場から資金を調達できるようになると銀行は媒介

役としての役目終え、そこからのレントが得られなくなってしまう。

そのためそチャンスを失わないために潜在的補完性があるにも関わらずあえてその機会をあえて見送るインセンティブがあるかもしれない。本稿では次に n 期間モデルを使ってそのインセンティブの存在を示すとともに、その実際例をデータを使って示す